尊厳死 かごしま
第 25 号

発行　日本尊厳死協会　かごしま
事務局　〒892-0822　鹿児島市泉町1－15
「公益財団法人慈愛会　事務局」内
TEL 099-223-1131　FAX 099-223-2444
URL　http://www5f.biglobe.ne.jp/~osame/sonngen/index-s.html

第23回公開懇話会

「死を『前に見る』ということ」

日本尊厳死協会かごしま　理事　井　上　従　昭

○　はじめに

2011年9月3日に開催された、日本尊厳死協会かごしまの第23回公開講演会は、「死を前に見るということ～生活の中で死と向き合う(ひとつのdeath　educationとして)」というテーマで、西本願寺僧侶の井上従昭がお話しをさせていただきました。特に難しい理論でなく、生活の中で死と向き合うこと、そしてそのことが私たちの人生を豊かなものにしていくということをこのテーマに込めてお話ししました。

○　「死を前に見る」とは

「死を前に見る」ということばは、釈尊の言葉（相応部経典・コーサラ相応）です。老いや死はもともと人間に内在しているものなのに、それに直面すると「死は突然やってきた」とショック受けるのは、「死を前に見ていない」からです。高度経済成長は、核家族・都市への人口集中をもたらしましたが、それは同時に仏壇のない生活（死が家庭の中にない生活・・仏壇は死の象徴でもありました）、近くにお墓のない生活（同様に死が遠い）をもたらしました。死が生活のなかに存在しないことは、死が突然にやってくるもの（やってくるはずのないもの）となってしまっています。結果として私たちは、死と向き合うことによってもたらされる心の豊かさをも失いつつあります。生活のスタイルの変化によって、私たちは、死を遠ざけただけでなく、「いのちのつながり」（ご縁ということ）、「死によって支えられている生」という意識なども希薄になっているのではないでしょうか。

○　私は「生・老・病・死の存在」いのちとは「生・老・病・死するもの」

生・老・病・死＝(私)＝(命)です。でも、このことに頷かない方向で近代の文化は形成されてきたのではないでしょうか。時間は止まりませんし逆戻りもしません。けれども現代の生活は、あたかも時間を止め、逆戻りさせるような錯覚に陥らせています。老とは突然始まるものではありません。病も私たちとともにあるものです。つまり私たちは、老い・病み・死ななければならないものとしてここに存在しているということです。そのことをしっかりと受け止めなければなりません。

○　私は「苦悩の存在」

釈尊は真理として「人生は苦なり」と言われました。これを諦観と言います。諦めるとは明らかにするということ、ごまかすことなく、私の人生は苦悩の連続であると受け止めていくことです。死を前に見るということと同じく、苦

を前に見るということが仏教の生き方です。それを避けようと様々な言い伝えや語呂合わせに振り回されがちですが、そこにはまことの豊かさはありません。四十九日が三月にかかるとよくないという俗説をよく聞きますが、「始終苦が身につく」という語呂合わせだとして避けようとしていると言われます。仏教者なら「始終苦が身につく」存在こそ私であると腹が据わるのです。臨済慧照禅師の言葉に「汝、しばらく随所に主となれば、立処皆な真なり」（どの場所にいてもその場の主人公になりなさい。そうすれば立っているところが全て真の場になります・・本当に真の生き方を得たいならば、苦しみのど真ん中を行きなさい。あなたが今いるところから逃げずに、その場の主人公になっていきなさい）とあります。

○　死を学んで(死を受け止めて)いるからこその豊かさ

幼稚園で6歳の男の子が、「お魚さんや豚さんや牛さんは偉いよね」と伝えてきました。彼は「僕は人のために命をあげることはできないけども、お魚さんや豚さんや牛さんは僕のために命をくれたのでしょう。だから偉いなと思う」というのです。頭が下がりました。「給食費を払っているので『いただきます』は言う必要がない」という大人がいるということを聞きます。みなさんはこのどちらに心の豊かさを感じますか?もし子どもの言葉に豊かさを感じるならば、その子どもの豊かさの背景には、「死」が6歳の子供なりにしっかりと意識されていることを見逃さないでください。死を学ぶことの大切さ、どんなに幼くても死を学ぶ大切さを感じていただきたいと思います。

○　死をかくさない生活文化・死を語れる生活文化を創造すること

鹿児島緩和ケアネットワークの研究大会でこんなことがありました。「答えられない問いに向き合う」というテーマで医療関係者がシンポジウムを行いました。シンポジストの一人として参加していた癌患者のkさんは、「人はみんな死ぬんだ」ということばを聞いて、自分の死を受け止めていきます。そして、kさんは「死とは何かを、死んだらどうなるのかを語りたい、しかし病院は死を語ることができない場所だ」と提起されました。そのkさんの問題提起に対して同席していた医師は、こういいました。「確かにそうです。病院は死を語れる場になっていません。それは改めていくべきだと思います。でも、死を語ることができない場所は病院だけでしょうか。私たちの社会全体が死を語らない、死を隠す場になっているから、結果として病院が死を語れない場になっているのではないでしょうか」大切な私たちへの問題提起ではないでしょうか。私たちがどんな生活文化を創造していくかが問われています。

○　死を忌み嫌う文化からの解放を

ロールプレイの研修で「お通夜」に取り組んだことがありました。その時に死体の役であった人が途中で立ちあがるというハプニングが起きました。その人はこう言いました。「もうやめなさい。そんな葬式ならしなくていい」友引は死んだ人が引っ張りに来るとか、塩をまかないといけないというような会話を、死体の役の人は、死んだ人の気持ちになって聞いていたのです。そしていたたまれずに立ちあがったのです。「昔からそうなっている」とか「みんながそうする」というとは、疑問を挟むことを許しません。「私はこう考える」ということを認めません。「輪を崩す」というような理由で。でも、死を忌み

嫌う文化は、人としての温かさを失っていること、人を尊敬し大切にする視点を失っていることに気付き、違う文化をつくっていきたいですね。昔からとかみんながということにとらわれずに、私自身が考えることが大切です。

○　寺とは道場　私が整えられていく場

寺では、死を隠しません。死を忌み嫌いません。だからこそ、時と所を超えて(私の思いなどはるかに超えて・生と死の隔たりを超えて)つながるいのちに出会う豊かさを獲得できます。寺とは普段何気なく思っていること、見過ごしていることをしっかりと見つめていく、そしてその中から本当の豊かさを獲得していく道場です。

最後に、柳生家の家訓を紹介します。

『小才は、縁に出合って縁に気づかず。
中才は、縁に気づいて縁を生かさず。
大才は、袖すり合った縁をも生かす。』

第24回公開懇話会
「認知症の最近の進歩と鹿児島地域の認知症」

鹿児島大学病院神経内科教授　髙嶋　博先生のお話しを聴いて

日本尊厳死協会かごしま　会長　納　光　弘

今回は「認知症」の専門家のお一人の髙嶋教授にお話をうかがいました。　私たちの会の名誉会長の内山　裕先生が以前、髙嶋教授の「認知症」のお話を聴いてすばらしいお話だったのでぜひ、公開懇話会にお呼びしようと提案され、髙嶋先生にお願いして実現したのでした。

お話の内容の要旨は次の様になります。

『物忘れといえばだれにでも起こることですが、度を超すと病的であり認知症といわれる状態になります。その境は、その物忘れによって日常生活に支障を来しているかどうかということであります。知的な探求心があり、趣味や楽しみを持ち、新聞をよく読んでいる方は、今のところ心配はいらないでしょう。しかし、本邦では、厚生労働省の統計では200万人以上がすでに認知症を発症しており、その前段階まで含めると350万人になるともいわれ、高齢化が進むにつれてますます大きな問題となってきています。

認知症の原因には、アルツハイマー病、脳血管性認知症、レヴィー小体病、正常圧水頭症をはじめ、様々な鑑別疾患があります。完全に治るとは言えないまでも、多くの病気に治療法がありますので、認知症の正確な診断と治療、そして予防が大切であります。

認知症の最も多い原因の一つはアルツハイマー病ですが、今年、新しく３種類の治療薬が加わり、少しずつ治療の幅が膨らんできました。

一方、多くの認知症は、年齢とともに発症するため高齢発症でありますが、64歳以下でもなることがあり、そのような若年性の認知症もみられます。若年性認知症においても、アルツハイマー病が多いのですが、それ以外の様々な病気が原因となり起こっていることも多く、極めて多様であります。認知症で大切なことは、単に「認知症」としてひとくくりにせずに、念入りに診断して、治療の可能性のある方に適切な治療をすることです。』

髙嶋先生は治療でよくなった患者様の例を多数示されました。私たちは、認知症の中に治療で画期的によくなる例がとても

多いことを知り、診断の大切なことを理解する事が出来ました。『適格な診断を受けるにはどの病院を受診するとよいか？』という質問には『鹿児島県内で神経内科の診療科を持っている病院や診療所は県内各地に数多くあるので、そのどこでも充分な診断を受ける事が出来ます』と答えておられました。

とても有意義なお話しを聴けて、皆さんとても喜んでくださいました。

☆役員会の動き☆

第１回平成23年９月３日（土）

議題１．九州支部第１回理事会報告
２．24年度総会・公開講演会の件
３．出前講座の実績と予定報告
４．理事の退任

第２回平成23年11月20日（土）

議題１．九州支部第２回理事会報告
２．かごしま会則一部改正
３．24年度総会・公開講演会は４月21日開催
４．「新老人の会」鹿児島フォーラム　後援
５．濱田陸三（鹿児島医療センター脳血管内科部長）氏が理事に就任

日野原　重明先生　100歳記念講演会　後援

と　き：　平成24年2月25日（土）午後１時30分～４時
ところ：　鹿児島市民文化ホール第一ホール
参加費：　1000円

納　光弘かごしま会長も会員のひとりとして活動している「新老人の会」で、５年前より企画していたもので、再度日野原先生をお迎えして記念講演会を開催することになりました。納会長が第１部で“夢追い人生”と題して講演します。

第24年度総会・公開講演会のご案内

と　き：　平成24年4月21日（土）午後２時～４時（開場1時30分）
ところ：　鹿児島県歴史資料センター「黎明館」講堂
鹿児島市城山町7－2　（TEL　099-222-5100）
演　題：　『限りある生をいかに生きるか』
講　師：　納　　光　弘　先生（日本尊厳死協会かごしま　会長）●入場無料●

尊厳死出前講座を希望される方は事務所までご連絡ください。

21年度実績　専門学校・病院など５回
22年度実績　民生委員協議会など２回
23年度実績　福祉施設・自主グループなど５回

編集後記

東日本大震災、大津波、突然の豪雨等々、日本だけでなく地球規模で大震災の年でありました。

突然の死に直面する悲しい現実にショックを受けましたが、死は別れではあるが断絶ではありませんと説かれた先生の教えに救われ、そして前向きに立ち上がる若人達の強い絆は頼もしく、今、何が出来るかを再考し、支えあえる生き方をしたいと思います。

（F・K）